

消化器外科・呼吸器外科がん患者の 全身麻酔管理について

座長

内田 寛治 先生

東京大学医学部附属病院 麻酔科・痛みセンター



事前予約を行っております。

(公社)日本麻酔科学会 第69回学術集会
HPよりご予約ください。

演題①

がん患者の全身麻酔管理： 消化器外科がんにどの麻酔薬を使いますか？

Anesthetic Management in Patients with Gastrointestinal Cancer

石川 真士 先生

日本医科大学付属病院麻酔科・ペインクリニック

演題②

呼吸器外科がん患者の全身麻酔管理について

General anesthesia management for patients with lung cancer

田中 克哉 先生

徳島大学病院 麻酔科

日 時

2022年**6月18日(土)**
12:20～13:20

会 場

第 11 会場

神戸ポートピアホテル本館 B1F 偕楽 2

WEB配信期間

本講演終了約2週間後～2022年7月13日(水)



演題①

**がん患者の全身麻酔管理：
消化器外科がんにどの麻酔薬を使いますか？**

Anesthetic Management in Patients with Gastrointestinal Cancer

石川 真士 先生

日本医科大学付属病院麻酔科・ペインクリニック

がん手術時にどのような麻酔をしていますか。近年、基礎研究、臨床研究において麻酔薬ががん細胞の活動性や再発、生命予後に影響を与えるとの報告が相次いでいます。麻酔薬はがん細胞の増殖能、遊走能に直接的に作用します。しかし、その作用はがん細胞の種類、麻酔薬によってがん細胞活動亢進、抑制と異なる作用を持つことが示されています。また、細胞間コミュニケーション、免疫能、炎症、外科的ストレスの影響と、がん細胞に対する麻酔薬の作用は多岐にわたります。そのため、がん手術全般に適する麻酔方法となると一定の見解を得られていません。

麻酔薬の選択が予後に与える影響については議論の余地があり、現状では患者背景や術式など他の因子から選択した方が良いと言われています。では、消化器外科がんの手術の特徴は何でしょうか。悪性腫瘍のため高齢者が比較的多いです。乳がんとは異なり、手術時間は長く侵襲性は高いです。ERASの観点からデスフルランの回復の早さは魅力的であり、術後合併症予防からデスフルランの選択が望ましい手術もあります。

今回、消化器外科がんを対象に、どのような症例でデスフルランの特徴を生かすことができるのかまとめていきたいと思います。

演題②

呼吸器外科がん患者の全身麻酔管理について

General anesthesia management for patients with lung cancer

田中 克哉 先生

徳島大学病院 麻酔科

呼吸器外科がん患者、ここでは肺がん患者について麻酔薬の選択が患者の予後に影響を与えるか講演をする。

肺切除術は分離肺換気が必要とする。今回、①分離肺換気による炎症反応、②HPVの問題、③がん再発の問題について④麻酔薬の違いが肺虚脱に影響を与えるか?についてお話しする。

1. 分離肺換気では換気側肺は過膨張になりやすく、非換気側肺は虚脱・再膨張が加わり炎症反応を惹起しやすい。吸入麻酔薬はTIVAより免疫反応を抑制し、抗炎症効果を発揮することが多くの臨床研究で示され、術後肺合併症が減弱すると報告されている。
2. 吸入麻酔薬はHPVを抑制するので、術中の肺酸素化能を悪化させると信じている麻酔科医がまだ多いのではないかと感じる。確かに吸入麻酔薬はHPVを抑制するが、現在使用されているデスフルラン、セボフルラン1MAC程度であれば心拍量減少などの効果と相まってシャント率はほとんど差がなく、その結果、術中の肺酸素化は麻酔薬で差がない。術後は肺合併症発生でむしろTIVAの方が低酸素血症に陥るという報告もある。
3. 吸入麻酔薬はTIVAよりもがん再発リスクが高いことが報告されている。これは吸入麻酔薬の免疫抑制作用に起因すると思われる。この作用はがんの種類によって異なることが知られ、肺がんでは、吸入麻酔薬およびTIVAで死亡率に差がないと言われている。しかし、n数が少なく今後の大規模臨床研究の結果を見守る必要がある。
4. 我々はデスフルランの気管支拡張作用、またHPV抑制による非換気側の肺血流温存で誘発される吸収性無気肺で、肺虚脱がTIVAより優れると考えて臨床研究を行った。得られた結果から、デスフルランは肺虚脱が優れていて、そのため術者は手術を安全に早く終了できる可能性があるとし唆された。

【まとめ】肺がん手術において、吸入麻酔薬は術後の肺合併症を軽減する可能性があるが、がん再発に関して今後の研究結果に注目する必要がある。